

ワインにおける“精神”や“魂”についてののにわかな考察

ワイン課通信 2011年 2月下旬号

最近、ふと考えることがあります。ワインに“精神”的という言葉がよく使われるが、
どういうことなのだろう？ そもそも、“精神”などといったものが存在しているの
だろうか？

そんな、日々なんとなく考えていることを少々まとめてみようと思い、
また、今現在の自分がどういったようなことを考えていたのか、
何年か後に振り返ってみたいとも思い、大変自慰的・自己満足的な内容になりますが、
今回のワイン課通信も“つまらない”文章で失礼いたします。



“シャンベルタンとクロ ド ベーズにおける精神世界(魂の世界)”

ご存知ジュヴレ・シャンベルタン村の特級畑の筆頭、いやブルゴーニュしいては
全世界のブドウ畑の筆頭とも言えるこの隣り合う二つの畑。
以前ある雑誌でこの二つの畑についての記事を読んだことが、今回のこのテーマを
書くことになったきっかけであるかも知れない。

シャンベルタンはよく『鉄の鎧の中の鉄の拳』。クロドベーズは『ベルベットの
手袋の中の鉄の拳』。だとか、強靱でたくましく肉体的なシャンベルタン。
エレガントで柔らかく、厳格で精神的なクロドベーズ。と言う風に比較される。
隣り合う二つの畑において、こうも異なる個性を認めることが出来るのも、面白いし、
ブルゴーニュのテロワールと言う概念を最も表現しているいい例なのである。
しかし、なぜこうも違いがでてくるのか？

今や、クロドベーズはシャンベルタンのリュードィの一部と考えている生産者も多いが
もともとは、クロドベーズのほうが歴史が古い。

AOC法上、クロドベーズはシャンベルタンを名乗ることが出来る。
商業的に考えられることも多く、これは賛否両論だが、それ以上にシャンベルタンは、
クロドベーズを名乗れないのは大変興味深いし、理解に易い。

“クロ”と名付けられた畑には修道会や教会所有のものが多く、すなわち宗教的にも
その土地に宿る“魂”エネルギーにおいても優れた畑であることが多い。

やがては、“王”に献上されてもいたのだろうか？

クロドベーズも例外ではなく、はるか昔に7世紀、ベーズ修道院によって開かれた。

逆に、シャンベルタンは“CHAMP(畑)” “BERTIN”。つまり
ベルタンさんの畑。クロドベーズのわずか後で、ベルタンという農夫によって開かれた。
つまり畑の誕生のとき、既にその表現しようとしているところが違ったのだ。

修道会は、その厳格な宗教的かつ精神的な“エネルギー”を表現しようとしたに
違いないし、そういうものが表現できる土地を選んだ。

農夫ベルタンは、自身を誇示すべくたくましく具体的で肉体的な“物質”を表現
しようとしたに違いなく、同じくそれを表現できる土地を選んだ。

思うに、この二つの土地の持つ ” 魂 ” は、そこに葡萄を植えた場合、それぞれの異なった個性をワインとして表現されることは、はるか昔から決まっていたのである。当然ここでは触れないが、この二つの畑のミクロクリマは、全く異なっている。しかし、最近思うのは土地の持つ ” 精神 ” ” 魂 ” という部分において忠実に表現をしようとすれなするほど、(今で言うテロワール尊重主義の生産者のように人為的介入を少なくすれば少なくするほど)

それは、ワインとしても忠実にそれを表現できていると思うのである。そしてそういったワインにとって人間の存在というものは、とても小さなものであり、しいてはテロワールのワインと言える偉大なワインたちになり得ると考えている。

私の考えでは、テロワールと言う表現を自身のワインの紹介に使っているワインにあまりいいイメージは受けていないが、いずれにしても人為的な介入が多すぎる生産者は、その土地の ” 魂 ” ” 精神 ” を表現できないことはいうまでもない。さらにいうなれば、そのようなワインはただの ” 商品 ” であるとしか言いようがない。まあ、ワインと言うものは嗜好品ではあるので、その商品を好む人もいるかも知れないが・・・。

ワインとは土地の ” 精神 ” ” エネルギー ” の表現 であると共にそれぞれの ” 美 ” の表現



” 美 ” という表現を使う生産者。思い当たる節がある方も多いと思うが、マダム ラルー・ビーズ・ルロワはこう語る。

『精神的なワインとそうでないワインがあるとは思いません。陽気で栄光を讃えるかのようなリシュブールと、真面目で威厳のあるシャンベルタンは、誰でもわかる両極端な性格ですが、どちらも精神的なものです。ただ、エネルギーのありようが異なることで、テロワールの違いが出て来るのです。』 とワインに ” 精神的な ” という言葉を用い、さらにマダムは、『それぞれのオペラシオンにそれぞれの美が存在しているのであって、それぞれの美の表現に対して最初から決まった限界があるわけではありません。』とした上で、『オペラシオンのあいだに上下はありません。』と続ける。

これについて私の解釈は、一言でいうなれば

《テロワールの表現とはその土地やそこに生きとし生けるもの全ての、 ” 精神 ” ” 魂 ” ” エネルギー ” の表現である》

(もちろん、そこには気候やヴィンテージ・人も含まれる。)

と解釈していて、後者のコメントにおいては、オペラシオンに上下があるのではなくいかにそこに生産者側がテロワールとしての ” 精神 ” ” 魂 ” を込められるのかが、上下(良し悪し)の定義であるのではないかと考えている。

ただ、ここで注意すべきは、マダムはテロワールの真理とは言わず、 ” 美 ” という表現を使っている。某誌に書いてあった文章と多少私の意見は異なるが、いずれにしても ” 美 ” という言葉は気をつけなければならない言葉だ。つまり、今自分の行っている ” こと ” が ” 美しい ” ということに満足し結果が伴っていないことが多いからである。

例をとれば、ビオと言う環境を考えた ” 美しい ” ことをやっていることに満足して、安定しない・臭いワインを造っているとか。

もっと悲しいのは、正義は必ずしも美ならずといった開き直った発言を聞く機会が増えたこと。

従って、私たちは宣伝文句に惑わされず、自身で何が ” 美 ” なのかを判断し選んでいかななくてはならない。

しかし、ここに人には ” 愛 ” というものの存在がちらほら顔を覗かせる。

多少の欠点は ” 愛 ” という大きなものによって肯定的に変貌を遂げる。

皆さんも、誰かを愛した時、大切に思ったとき、尊敬できるとき、

多少の欠点が覆い隠されると言うことがあるでしょう。

私もそんな偏った ” 自然派ワイン愛 ” を持った人間の一人であるので

私にとって ” 美 ” である自然派のワインを飲むとき、多少の欠点はその愛で

肯定的に捉えてしまうのだが、自分で飲む場合はよいものの、ワインを売る

という立場においては、何がお客様にとって ” 美 ” なのかを常に

考えていかなければならない。と常々思っているところである。



- ・ 土地の ” 精神 ” ” 魂 ” を表現するワイン。
- ・ 人の ” 精神 ” ” 魂 ” を表現するワイン。
- ・ 売り手の ” 精神 ” ” 魂 ” や思いを伝えるワイン。
- ・ 飲んだとき、人の ” 精神 ” ” 魂 ” を揺さぶるワイン。
(ワインに ” 精神 ” ” 魂 ” があるから、人の ” 精神 ” ” 魂 ” を動かす。)

最後にやはりワインは ” 精神 ” ” 魂 ” の飲み物であると結論付けたい。
これは、あらゆる側面から見てもそうだと考える。

私はそもそも体育会の人間で精神論や ” 根性 ” やオザミの社訓？ ” 気合 ” などといった言葉たちは大好きだし、いや、大好きと言うよりは5歳のときから当たり前であった。最初は、高級なイメージでお高いお飲み物。ある種 ” モノ ” であると考えていたので、精神論で語られる世界にまさか ” ワイン ” がとは思っていたが、あるワインを口にしたとき、ワインは精神論的な飲み物だな。とふと思った。先輩たちがうだうだと蘊蓄を語っているのにそう感じたのかもしれない。ただ、なんとなく実感がわかなかったものの、自分と同類項を見つけうれしかったのかワインを飲むときの ” 魂 ” を動かされる経験をずっと肯定したかった。ワインの生産者と出会い、多くのワインに触れていくにつれてその思いは強くなった。雑誌や話でワインの ” 精神 ” ” 魂 ” などといった言葉を目にする度、自分の思いは膨らんだ。決定的な出会いは、ある自然派のワインとの出会いだった。そのワインには、何か ” 精神 ” 的なものを感じたし、 ” 魂 ” が宿っていると感じた。それから私は、そういったワインの虜になり今に至る。



皆さんもワインから何か感じたことがありますか？
もしあるのなら、その経験はとても大切にしていきたいと思います！
私は、生産者・土地の”精神” ”魂”を表現されたワインをたくさんお客さまや
周りの人に紹介したい。
化学的なものを入れたワインには、”魂”は存在しないか、弱いでしょう。
活きたワインだけが、伝えられることがあります。
我々にできることはなんでしょう。
飲む側の”美”を理解し、飲む側の”魂”を動かすワインを見出す努力をしていきたい。
その視覚的”眼”だけでなく”精神”的な”眼”を養っていかなくてはならない
と感じています。
我々もこの大きなワインの”魂” ”精神”を感じ取る感受性を養っていかなくては
ならないと感じています。
それがきっと、たくさんのワインファン、皆さんが働いているお店のお客様、
オザミのお客様につながっていくのだと思うのです。

ワイン課

林 真也